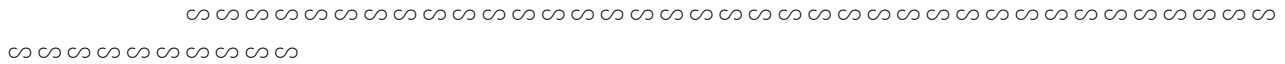


# わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第119号

イザヤ 65:1

平成17年8月26日



その後、私は見た。見よ。天に一つの開いた門があった。また、先にラッパのような声で、私に呼びかけるのが聞こえたあの初めの声があった。「ここに上れ。この後、必ず起こる事をあなたに示そう。」たちまち私は御霊に感じた。すると見よ。天に一つの御座があり、その御座に着いている方があり、その方は、碧玉や赤めのうのように見え、その御座の回りには、緑玉のように見える虹（光輪）があった。また、御座の回りに二十四の座があった。これらの座には、白い衣を着て、金の冠を頭にかぶった二十四人の長老たちがすわっていた。御座からいなすまと声と雷鳴が起こった。七つのともしびが御座の前で燃えていた。神の七つの御霊である。御座の前は、水晶に似たガラスの海のようにであった。御座の中央と御座の回りに前もうしろも目で満ちた四つの生き物がいた。第一の生き物は、ししのようにであり、第二の生き物は雄牛のようにであり、第三の生き物は人間のような顔を持ち、第四の生き物は空飛ぶわしのようにであった。この四つの生き物には、それぞれ六つの翼があり、その回りも内側も目で満ちていた。彼らは、昼も夜も絶え間なく、叫び続けた。「聖なるかな。聖なるかな。聖なるかな。神であられる主、万物の支配者、昔いまし、常にいまし、後に来られる方。」また、これらの生き物が、永遠に生きておられる、御座に着いている方に、栄光、誉れ、感謝をささげるとき、二十四人の長老は御座に着いている方の御前にひれ伏して、永遠に生きておられる方を拝み、自分の冠を御座の前に投げ出して言った。「主よ。われらの神よ。あなたは、栄光と誉れと力とを受けるにふさわしい方です。あなたは万物を創造し、あなたのみこころゆえに、万物は存在し、また創造されたのですから。」  
黙示録4：1～11.

イエスの愛弟子ヨハネがエーゲ海のパトモス島でキリストから受けた啓示は、ヨハネの時代の七つの教会へのメッセージ、警告に始まり、近未来から遠未来に及ぶ非常に興味深い預言でした。御霊に導かれるままにヨハネは、「この後、必ず起こる事」を示されたのですが、眼前に繰り広げられるメッセージは天界の光景から始まります。今月は、天に開いた門からヨハネが垣間見た天、天の御座の回りの実に賑やかで忙しく、活気に満ちた不思議な光景に私たちが入っていくことにしましょう。

聖書は天界を大きく三つに分けて、第一の天、大気圏を「空中の権威を持つ支配者」サタンの領域、第二の天をすべての天体を包含する宇宙、第三の天を神の御座のある神の御住まいと特徴づけています。ヨハネが導かれたのは第三の天でした。天の御座に座っている方をヨハネは、「碧玉」「赤めのう」、緑玉のような「虹」になぞらえて描写しています。これらの宝石はモーセの掟に通じていたユダヤ人にとって大祭司を思い出させるものでした。イスラエルの大祭司が神殿奉仕に当たるとき身に着けた装束『エポデ』の胸当てには、宝石が四列に十二個はめ込まれていましたが、各宝石はイスラエルの十二部族の各々にちなむものでした。第一列の最初の宝石は「赤めのう」で、族長ヤコブの長子ルベン（「息子を見よ」の意）の名が彫られ、第四列の最後の宝石は「碧玉」で、十二番目の息子ベニヤミン（「右手の息子」の意）の名が彫られていました。またその御座を取り巻く円形の虹は、「その回りにある輝きのさまは、雨の日の雲の間にある虹のようであり、それは主の栄光のように見えた」（エゼキエル1：28）と、エゼキエルが描写しているように、その方の御臨在を象徴する光輪でした。天界では、地上の半円形の虹とは違って全円になるのでしょうか。ヨハネが描写したのは、「私たちの大祭司は天におられる大能者の御座の右に着座された方であり、主が設けられた真実の幕屋である聖所で仕えておられる方」と、ヘブル人への手紙の著者が表現した、昇天後栄光をお受けになり、父なる神の右の座でまさに「永遠の大祭司」として執り成しをしておられる御子「初めであり、終わりでである方、死んで、また生きた方」の御臨在そのものでした。御座におられる方を、天界の被造物が一斉に、「神」であることはもちろんのこと、「後に来られる方」とも呼び、礼拝していることから明らかなように、その方は、今は天界で「大祭司」として執り成しをしておられるが、やがて「王」として地上に再臨される、紛れもない『人類の救い主』イエス・キリストその方でした。

御座の回りにはまず、燃えている「七つのともしび」に象徴される「神の七つの御霊」なる聖霊の御臨在がありました。イザヤはこの聖霊を「主の霊、知恵の霊、悟りの霊、はかりごと（助言）の霊、能力の霊、主を知る知識の霊、主を恐れる霊」（イザヤ11：2）として、七つの特徴で表現される方として描いています。これらの聖霊の働きはすべて、初臨の御子イエス・キリストに反映されていたものでした。御座の回りにはさらに四つの不思議な生き物がはべっています。ヘブル語聖書に記されているイザヤ、エゼキエルによる御座の回りの描写を考慮すると、動物のような特徴を兼ね備えたこれら天界の生き物は、燃えさかる火によって聖められた「セラフィム」か、あるいは、幕屋、又は神殿の至聖所に置かれた『あかしの箱』の『贖いのふた』をおおう「ケルビム」かの、いずれかの御使いのようです。「聖なる、聖なる、聖なる、万軍の主。その栄光は全地に満ち。」（イザヤ6：3）とセラフィムは昼夜、絶え間なく呼び交わし、御座に着いている方に栄光、誉れ、感謝をささげていますが、セラフィムの異様な容姿は、これら四人の御使いが神を礼拝するだけでなく、他にも特別な役割りを担っていることを象徴しているかのようです。「前もうしろも目で満ちた」と表現されている数知れない目は、全知全能の神を、また、「六つの翼」「絶え間なく叫び続ける」休む間もない言動は遍在の神を思わせるものです。

「しし」「雄牛」「人間」「空飛ぶわし」に似た彼らの顔は、計り知れない神の御姿、属性の中でも特に次の四つの御姿 一力強い王、大祭司、苦難のしもべ、聖なる方一 を印象づけるものでした。この生き物に関しては、多岐に亘り細微にまで言及する、実にユニークな解釈がたくさんあります。その一つは、簡潔に言えば、これらの生き物の『四つの顔』が新約聖書の《四福音書》を象徴するものであるというものです。

「しし」は《マタイ》でイエスの「メシア（油注がれた王）」像を、「雄牛」は《マルコ》でイエスの「苦難のしもべ」像を、「人間」は《ルカ》で「人の子」としてのイエスを、「わし」は《ヨハネ》で「神の子」としてのイエスをそれぞれ印象づけているとする解釈です。しかし、これらいつも神のみ傍にはべっている四つの生き物の特徴に、神の属性のうちの四つの局面が反映されていると捉えるのが一番自然な解釈ではないかと思えます。

さて、神はご自身を顕わされるのに多くの名を用いられましたが、三百以上もの名がある中で最も多く用いられているのは、ある聖書教師たちの研究によれば次の四つの名だそうです。ヘブル語聖書では神の名が明らかに目的によって、使い分けられているようですが、興味深いことに、神のこれら主要な四つの特徴は、ここに登場する生き物の『四つの顔』の特徴に関連づけることができるのです。

- ① ヤーウェ・ツァバオット、万軍の主：天の大軍勢を率いられる力強い「万軍の主」は野獣王国の王者「しし」に、
- ② エル・エリオン、いと高き方、いと高き神：大祭司として民に仕え、民を守り、弁護してくださる「いと高き神」は、家畜を代表し、人間の罪の代わりに動物犠牲としても用いられた「雄牛」に、
- ③ エル・シャダイ、全能の神：ヘブル語の「シャド（胸）」から派生した、神の母性的属性を最も表わしている名であり、乳飲み子を養うように最善の備えをもって臨んでくださる「全能の神」は、人間の感性に、
- ④ エル・コデシュ、聖なる方：1441BCE、神がイスラエルの民を「わしの翼に載せ」、エジプト支配の地から驚くべき迅速さで荒野の道を先導し、紅海（今日のアカバ湾、「ピ・ハヒロテ」から「バアル・ツェフォン」）を渡らせ、ホレブの山のあるミデヤンの地（今日のサウジアラビアのアラビア半島）に導き、出エジプトを成功させられたこと、また、七世紀BCEの預言者イザヤに与えられた、二世紀近くも後世に成就した「捕囚先バビロンからのイスラエルの民のエルサレム帰還に関する預言」の中の、主を信頼し待ち望む者は自分の弱さを神の力に置き換えることによって「鷲のように翼をかけて上ることができる」という明るい見通しとともに、神の贖いのわざに言及するものでしたが、聖書で神の迅速な贖いのわざを象徴するのに決まって用いられているのは「わし」です。言い換えれば、「主の御目はどこにでもあり、悪人と善人とを見張っている。」（箴言15：3）と記されているように、迅速に悪を探知し裁きを下される、聖なるがゆえの神の、不義、汚れにを間違いないく捕える動きが「わし」にたとえられているようです。このようにイスラエル史において過去、神の贖いのわざが速やかに行なわれたように、来るべき終末の時代の最後の最大難のときにも、「大わしの翼を二つ」与えられるイスラエル（ユダヤ人）が神によって速やかに避難の地に連れられて行き養われること、すなわち、神の人間史への画期的な御介入が再びあることが預言されていることは銘記しておくべきでしょう（黙示録12：14）。したがって、人類救済の最後の贖いのわざを速やかに行なおうとご計画遂行のタイミングを待っておられるイスラエルの「聖なる方」は鳥獣王国の王者「わし」に、というように、奇しくも神の属性がこれら四つの生き物に反映されているのです。

実際、ヨハネが見ている間にも、神の七つの御霊と四つの生き物に囲まれた「御座からいなずまと声」と雷鳴が起こり、「地上への神の御介入、すなわち、何らかの裁きが下されたようですが、御座の前は「水晶に似たガラスの海」のようであった」と、怒濤に逆巻く地の「海」に象徴される邪悪な諸国民、安らぎのない人間世界とは全く対照的に、ヨハネは、天界の御座の前の曇りの全くない聖さ、静寂、平安を描写しています。御座の回りでは四六時中、すべての被造物による永遠なる神への賛美、全身全霊での礼拝が続き、喜びの騒がしさが渦巻いているようですが、その中で大きな役割りを担っているもう一つ別のグループの人たちがいるようです。「二十四人の長老」です。彼らの正体が天の御使いなのか、人間なのかで議論は分かれています。預言者イザヤとエゼキエルが天界の神の御座を描いたときには存在しなかったこれらの長老たちは、祭司が身に着けた「白い衣」を着て、冠の中に冠が飾られている王のかぶる「多重冠」（邦訳では、「多くの王冠」黙示録19：12）ではなく、競技の勝利者に与えられた花冠、リースのような「金の冠」をかぶっていることから、天の御使いではなく、贖われた人間のようなようです。彼らがかぶっている冠は、新約聖書で「朽ちない冠」「喜び（キリストの誇り）の冠」「義の栄冠」「いのちの冠」「栄光の冠」として描かれている、再臨のキリストが「裁きの座」で信じる者たちに与えてくださる報酬の冠のようです。

また、聖書の中で、「長老」という用語が御使いに用いられた例はなく、御使いに勝利の冠が与えられたり、贖いの対象として創造されたという記述もないことから、「ほふられた小羊」主イエス・キリストを賛美し礼拝しているこれらの長老たちは、キリストの血潮によって贖われた者たちであることはまず間違いないようです。新約聖書では、「長老」は、初代教会の中の最重要な聖職に位置づけられています。「長老」はキリストの群れの監督に立てられ、使徒とともに「キリストのからだ」なる教会を代表する重職だったのです。イエスの十二弟子のペテロもヨハネ自身も自らを「長老」とみなしていたことが、各々が書いた手紙から窺えるのは注目に値します。「二十四」という数は、イスラエルのレビ族の祭司制度でダビデ王によって任命され、年間の神殿奉仕に登録された祭司たちの数であることから、全祭司制度を代表するものとして象徴的に捉えることができるかもしれません。あるいは、イスラエルの十二部族とイエスの十二人の弟子たちを合わせて二十四とみなせば、贖われた者たちのすべてを象徴するものとみなすことができるかもしれません。